トランスナショナルな空間が生み出したナショナルなアイデンティティ

坂井田　夕起子

エリック・シッケタンツ著
堕落と復興の近代中国仏教
日本仏教との邂逅とその歴史像の構築

A5判　398頁
法蔵館
［本体5000円＋税］

「宗派」という日本仏教的なもの

日本津々浦々にあるコンビニの数よりも多い日本の仏教寺院。けれど、自分の家が何宗の檀家なのかと聞かれても、即答できる人は少ない。現代日本を生きる私たちが、自分たちの生活の中の仏教を意識することはあまりない。寺院や僧侶の存在を積極的に意識するのは法事や葬式ぐらいだが、そんな時でさえ故人の人となりに思いをはせることが中心だ。

一方で、仏教を思考する段階になると、途端に「宗派」が重要となる。社会人講座などで中国仏教に関わる話をすれば、必ず「それって具体的にどの宗派の話なのですか？」と質問が来る。中国の仏教はきっちり宗派に分れていないし、日本の仏教教団のような本山―末寺の関係もない。住職によって寺院の宗派も変わりますと答えると、南都六宗を思い出して納得してくださる方は少数で、「そんなバカな」だの「いいかげんな」と中国人に代わっておしかりを受けることも多い。

「諸行無常」と聞けば「everything changes」ではなく、「祇園精舎の鐘」を連想する日本人は、仏教を日本的な「宗派」の枠組なしで思考できない。僧侶の肉食妻帯が日本限定なことは若干知られているものの、同じく日本仏教に特徴的な「宗派」はかなり意識されにくい。そんな日本仏教の「宗派」問題に切り込み、中国との関わりをあざやかに浮かび上がらせたのが本書『堕落と復興の近代中国仏教』である。

著者のエリック・シッケタンツ氏はドイツ生まれ。ロンドン大学東洋アフリカ研究学院を経て、東京大学大学院で宗教学を学んだ。著者の博士論文を元に、加筆集成したのが本書である。

『堕落と復興の近代中国仏教』

江戸時代まで、日本人仏教者たちは鎖国の中で中国の仏教を過度に理想化していた。そして、開国によって憧れの中国に渡航した明治時代、現実の中国仏教を目の当たりにして驚いた。しかし、過去の輝かしい中国仏教は日本仏教の源流であり、神聖不可侵である。日本人仏教者は、勝手に理想化した過去の中国仏教イメージを基準に、現代の中国仏教が「堕落」したと考えた。それだけではない。勝手に衰退させた中国仏教を「復興」させることが、アジアに冠たる日本人の使命だと考えた。

もちろん中国人たちも、日本人の勝手な評価を黙って押し付けられはしなかった。西洋哲学との接触により近代化を果たした日本仏教を鑑としつつも、一方では日本的な仏教のあり方を批判し、中国独自の仏教「復興」を模索したのである。

本書が描くのは、一九世紀末から二〇世紀前半の東アジア地域における秩序再編成の中で、「日本帝国の学知」の大きな圧力に抗らい、近代的な国民国家建設に貢献し、社会的な存在価値を主張しようとした中国仏教の姿である。それは同時に、日本仏教の近代を映し出す鑑でもあった。

本書の構成とその内容

本書の構成は全四章で、序論と結論が添えられている。第一章「明治・大正期における日本人仏教者の中国仏教観とその思想的背景」、第二章「近代中国における仏教堕落論」、第三章「近代中国仏教における宗派概念とそのポリティクス」そして、第四章「民国期の密教復興」である。各章はそれぞれ八～一五節で構成されており、課題の設定と小結がある。読者は本書を順番に読まなくても、興味ある章から読める構成になっている。

本書で著者が描く歴史像には、大きく二つの流れがある。一つは、明治以降の日本人仏教者が描き出した中国仏教「堕落論」を中国側がどう受容し、反発しながら中国仏教優越論に結びつけたかという物語である。そしてもう一つは、中国仏教「堕落論」にもとづき、中国で失われた宗派を日本から逆輸入し、「復興」させようとした物語である。この二つの流れは、ある部分では一致し、ある部分では対立し、相互に影響しあい、複雑に絡み合っている。この錯綜の過程こそ歴史研究の醍醐味であり、本書の魅力である。

以下、各章毎に内容を見ていきたい。第一章では、明治以降、あこがれの中国渡航を果たした日本仏教者たちの旅行記を読み解いていく。明治の開国によって中国に渡った仏教者たちは、自分たちの宗派の開祖が学んだ寺院や歴史的に著名な寺院が廃墟のような状態にあることに驚き、その事実を中国仏

教の「衰退」と結びつけた。また、明治以降の「新仏教運動」などを経て、社会貢献することが当然になった日本から見れば、出家して世俗と関わらない中国仏教は旧態依然に見えた。さらに古代から、主に書物を通じて中国仏教を吸収してきた日本人は、経典や仏教書の普及率の低さも「衰退」と捉えた。しかし、日本仏教の源流としての中国仏教は、尊重されなければならない。そこで、日本人仏教者は衰退した中国仏教を「復興」させるのが自分たちの使命だと考えたのである。

第二章では、清末民初の思想史の流れのなかに「中国仏教堕落論」を位置づけ、その意味を明らかにしていく。そもそも清末民初の僧侶たちの「堕落論」はレトリックとして使用されるもので、現実を反映しているとは言い難かった。清末には多くの仏教者たちが仏教の末法思想にもとづいて「堕落」を語ったが、「末法」と亡国を結びつける論法は明末やそれ以前から存在した。しかし、清末民初の「末法」論が他の時代と異なるのは「経世仏教」を生み出したことで、改革や革命を唱える人々のレトリックとしても積極的に用いられた。梁啓超や蔡元培などが代表的な人物であり、仏教衰退をなげき、復興を唱える言論の裏側には国民国家の概念や救国の思想があった。

第三章では、日本的な中国仏教研究がいかに中国に受容されていったかを明らかにしている。明治日本の仏教教団が有望な若手を西欧に留学させ、帝国大学に講座を開設するなどの近代化努力を行った。そのような西洋中心史観との闘争の中から生まれた「東洋」概念は、日本中心史観として自画像を再構築し、アジアにおける仏教も、諸宗派・仏書・人材の全てを備えた日本の優越性が主張される結果となった。

「宗派」については、鎌倉時代の華厳宗僧凝然の著書が再評価され、近代日本の諸宗派を語る際の教科書のような役割を果たした。凝然の著書にもとづいて、明治大正期の中国仏教史研究の第一人者であった境野は、仏教がインド→中国→日本と段階的に発展したと考えた。そして、中国仏教は隋唐時代の諸宗派の成立を頂点に、その後宗派性が薄れて衰退したと理解された。

以上の日本的な宗派理解と中国仏教理解が、中国で受容されていく過程が本書の背骨となる。例えば、イギリス留学で知り合った南條文雄を通じ、中国で失われた経典を数多く復刻した楊文会は凝然の著書を教科書的に扱った。他の日本人研究者の著書は批判的に受容した楊文会も、凝然の著書だけは「古籍」と捉え、その中に理想としての唐代仏教を見つけ、「復古」（ルネサンス）を目指した。さらに民国期の出版業の発展は、楊文会の著述を多くの雑誌に掲載することになり、彼の主張は再生産され、仏教界以外にも影響を拡散した。彼の

主張は現代の中国の仏教にも大きな影響を残している。

第四章では密宗を中心に、中国仏教「復興」の過程が明らかにされる。一九二〇年代、密宗を学びに高野山に留学した中国人僧侶は複数いた。密宗が注目された背景には、①密宗が中・上級階級に属する人々の注目を集めたこと、②自然災害や戦災に苦しむ中国社会に呪術的な要素が期待されたこと、そして③仏教統一の宗教としてナショナリズムの側面が期待されたという事情があった。中国仏教の絶頂期に栄え、その後何らかの形で失われた密宗の「正当」な法脈を、日本から逆輸入しようとした王弘願は、日本側と協力し震旦密教重興会を組織した。ただし、空海を祖とする姿勢や日本的な密宗の女性観、さらには肉食妻帯という日本仏教の「戒律破壊」の部分が他の中国人仏教徒に問題視され、著名な改革派の太虚らを中心に批判を受けた。そして、日本の軍事侵略をも肯定する運動と捉えられ、いつの間にか消滅してしまった。

「戦争協力」や「文化侵略」の議論を越えて

近代日本の仏教は「日本」というナショナルな存在との関係を通じて自己を再定義しようとし、中国の仏教は「中国」という存在を通じて同じような試みをなそうとしたと著者は主張する。これら近代仏教の自画像の構築は、越境という側面を持っており、日本と中国は互いに大きな影響を及ぼした。そして直接的な邂逅のみならず、近代的学知を通しても形成され、中国仏教にとって日本仏教は「顕著な模範」であり、場合によっては「危機」でもあったと結論づけている。この、「模範」と「危機」の概念は非常に示唆的である。

日本における近代仏教と中国の関係史については、従来、多くが日本と中国の二国間の枠組みで固定した仏教史（教団資料にもとづく）の視点で語られてきた。しかし、本書は英語やドイツ語の文献を主体とする近代中国史の研究蓄積が多く参照されている。また、要所ではインド仏教史の成果も用いられており、視野の広いアジア仏教史の視座を提供している。

著者は密宗復興運動を事例に、当時の日本と中国の間のトランスナショナルな交流は、二つのナショナルなコミュニティから一定の距離を保つことのできる空間であったと指摘する。同様にドイツ人である著者が日本語や中国語資料を分析し、欧米の文献を広く参照してあらわした本書は、日本と中国のそれぞれのナショナルな背景を持つ研究の磁場から一定の距離を保つ貴重な成果であり、示唆に富む。本書が多くの読者の手にとられることを願ってやまない。

（さかいだ・ゆきこ　愛知大学国際問題研究所）